２－６．山倉大神の鮭祭りに見る歴史的風致

（１）はじめに

香取市の南部に位置する山倉地区は、下総台地東部の丘陵上、標高 20～40m ほどの場所に位置している。栗山川（くりやまがわ）支流の水源域で、周囲を囲むように畑地と水田の景観が広がっている。栗山川は成田市北東部を発し九十九里平野を通って横芝光町（よこしばひかりまち）で太平洋に注ぎ込む河川で、太平洋側で鮭が遡上する南限とも言われている。この支流の水源域が山倉地区にあたっている。

山倉大神の入口付近

山倉地区（南部）の景観

地区の中央に鎮座する山倉大神（やまくらだいじん）は、社伝によれば創建は弘仁 2 年（811）といわれ、市内外から広く参詣者が訪れる古社である。かつては「山倉大六天（やまくらだいろくてん）」などと称していたが、神仏分離により明治 3 年（1870）から山倉大神と改称している。「山倉様」として信仰を集めていて、かつては関東近県に各種の講（こう）が組織され、代参（だいさん）が行われてきた。また、江戸町火消しの信仰も篤（あつ）く、こうした代参講（だいさんこう）や東京の消防組などの奉納物や額などが境内には多数見受けられる。

「大六天王宮」の神号額

額殿の奉納額

この山倉大神で古くから行われている祭礼に山倉大神の鮭祭りがある。旧暦霜月（11 月）初卯の日に行われたことから「初卯大祭」とも呼ばれるこの祭礼

は、栗山川を遡上してきた鮭を献納する祭りで、その謂れは諸説あるが、神前に献ずる鮭は、古来より「竜宮神献の御鮭」として伝わる。弘化 3 年（1846）の宮負定雄『下総名勝図絵』にも「御神事十一月中の卯の日なり。疫病を悩むもの此の神を祈りて霊験すみやかなり。十一月祭礼の頃、鮭おのづから上る。是を獲たる人、山倉に持ち行くに、その人を祭礼の上席に居らしめて饗応する古例なり」と紹介されている。最近までは 12 月 7 日の卯の日が祭礼日であったが、平成 14 年からは 12 月第一日曜日に行われるようになった。

平成 17 年（2005）3 月 29 日に千葉県の無形民俗文化財の指定を受けている。

なお、山倉大神の別当寺である山倉山観福寺でも大六天王に対する鮭の奉献が続けられており、こちらは毎年 12 月 7 日に大護摩の修法が行われている。

（２）山倉大神の鮭祭りに関連する建造物

◆山倉大神本殿　＜香取市指定文化財＞

年代：安永 7 年（1778）

規模・特徴：流造、銅板葺、規模は正面・側面とも 2.5 間（4.5m）、屋根は昭和 56 年（1981）葺き替え。本殿と拝殿の間を幣殿で繋ぐ、権現造とも呼ばれる形式である。

拝殿

本殿

社伝によれば、山倉大神の創建は弘仁 2 年（811）辛卯の霜月初卯の日で、この地方に疫病が流行した際に、祭神を勧請したとされる。現本殿は安永 7 年（1778）3 月 5 日に建立された。主祭神は高皇産霊大神（たかみむすびのおおかみ）、配祀神は建速須佐男尊（たけはやすさのおのみこと）、大国主尊（おおくにぬしのみこと）である。

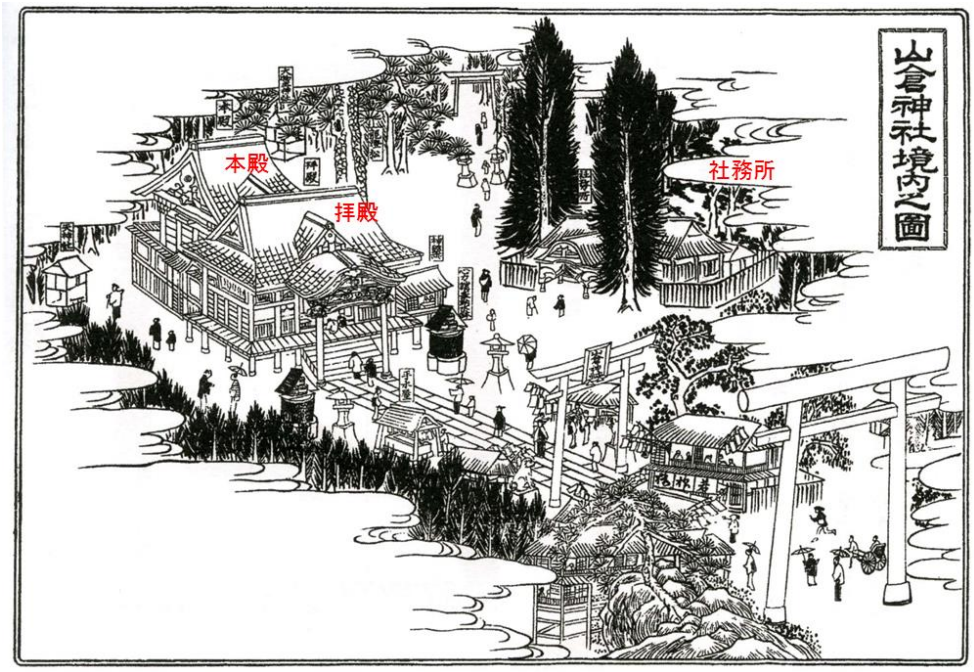
山倉大神（大正 10 年）

明治以前までは、当地の山倉山観福寺が別当を

務め、本尊である大六天王が本地仏として祀られていたことから、「山倉大六天」などとして知られていた。山倉大神を称するのは明治 3 年（1870）からで、廃仏毀釈により大六天王が観福寺に遷座されたあととなる。拝殿中央に掲げられた文政 9 年（1826）寄進の社号額にも「大六天王宮」とある。その他、いずれも明治以降のものであるが、社務所（明治期）、額殿（明治 42 年〈1909〉）、神楽殿（大正 3 年〈1914〉）、神輿殿（昭和初期）、直会所（昭和期）などの建造物が境内に配置されている。

明治 24 年（1891）『山倉神社略縁起』にも当時の境内の様子が記されていて、本殿、拝殿などの社殿の他に、現在もある社務所と思われる建物が描かれている。

山倉大神は、かつて代参講により、東京や横浜などの講中の崇敬を受けていて、境内の寄進物などからもそれが見受けられる。例えば、額殿には心力元講、賽銭箱や手洗石には昭和講、神輿殿は江東講などの講名が記さており、その他多数の額が講中により奉納されている。また、江戸東京火消（消防組）の奉納額も残されている。消防組が参詣した理由は不明だが、地元の古老によると、刺子を着た消防組が「木遣り」を歌いながら行列を組んで社殿に参拝したこともあった、とのこと。



『山倉神社略縁起』（明治 24 年〈1891〉、一部加筆）

（３）山倉大神に伝わる鮭祭り

山倉大神の例祭は、かつては旧暦霜月初卯の日に、神前への鮭の奉献を中心に行われてきたもので、「初卯祭（はつうさい）」と称しているが、一般には「鮭祭り」として親しまれている。弘化 3 年（1846）の『下総名勝図絵』にも「御神事十一月中の卯の日なり」と紹介されている祭礼である。最近までは毎年 12 月 7 日に行われてきたが、平成 14 年度からは 12 月第一日曜日に行うようになった。

鮭祭りの由来については諸説があり判然としないが、本社の創建の由緒に係るものであると考えられている。社伝では、この地に悪病が大流行している折、僧円頓が栗山川を遡上した鮭を捧げ、霊験あらたかな御祭神を勧請し、熱心に祈祷した効果があり病魔が退散した、とある。山倉大神の例祭日は、創建日である旧暦霜月初卯の日に行われるが、例祭日近くなると付近の栗山川などに鮭が遡上し、これを神前に献納してきたとしている。

この山倉大神の例祭である鮭祭り（初卯祭）は、毎年 12 月第一日曜日を中心に、宵祭り（前日）・例祭・残祓い（翌日）の前後 3 日間にわたり催行される。

①組織

山倉大神の鮭祭りは、地元住民で組織する山倉大神崇敬会が母体となり氏子で崇敬会員総員の奉仕により執り行われる。その中で祭当番（まつりとうばん）は、地区内の 15 組を組み合わせて 6 つに分け、輪番でこれに当たる。

1	1-1組	1-2組	1-3組
2	2組	3組	
3	4組	5-1組	
4	5-2組	6-1組	6-2組
5	7組	8組	9組
6	10組	11組	

祭当番組合せ

祭当番の中から、一ケ月前までに総行司（１名）、猿田彦（１名）、供方（ともかた）（2 名）、賄役（まかないやく）（正副各 1 名）、座配人（ざはいにん）（1 名）、包丁頭（ほうちょうがしら）（1 名）、魚類勝手（ぎょるいかって）（5 名）をまず選出し、準備にあたる。

例祭二日前には役定（やくちょう）と称して、宮司、禰宜（ねぎ）、崇敬会正副両会長、氏子総代、総行司、猿田彦、賄役が、その他の祭事要員を選出し例祭に当たる。なお、祭事要員は当年の祭当番では不足するため、来当番（らいとうばん）（次年度の当番）からもこれに加わる。

典儀	1名	楽人	3名	神札授与	2名	御札場	4名	御鉾	2名
総行司	3名	神与係	16名	祈祷受付	2名	包丁頭	1名	錦旗	2名
猿田彦	1名	賄役	2名	魚類勝手	5名	金棒	2名	御太刀	1名
供方	5名	座配人	1名	内夫	若干名	唐櫃	2名	御弓	1名
供奉員	15名	来賓受付	2名	御鮭場	3名	長柄	2名	呉床	2名

祭事要員

②山倉大神の鮭祭りの概要

ア）宵祭（よいまつ）り（前日）

●幟立て（午前 6 時）

初卯祭の準備日で、早朝 6 時に来当番（次年度の当番）による幟立てで始まる。

幟立て

●例祭準備（午前 8 時）

本当番は境内の清掃を終了して一時帰宅し、午前 8 時に再集合して初卯祭の準備をする。主な作業は、①社頭に国旗掲揚（夕刻格納）②御仮屋や御鮭場の組み立て建立③炊事用具、食器類の取り揃え、本膳 100 人分の確認、点検④社殿、境内の清掃、整備装飾⑤駐車場の準備、などとなる。

食器類の準備

●護符の奉製（午前 8 時）

この日は、魚類勝手係による「包丁式（ほうちょうしき）」の神事により、鮭を小さな切り身にして翌日の例祭の護符を奉製する。神職立会いのもと、装束をまとった魚類勝手係 5 名が包丁頭の指示のもと、塩漬けの鮭を小さく切り分け銀紙に包み、護符袋へ納める。この鮭の切り身の護符は、秘伝の鮭の黒焼きと共に「災いや病気をサケるお守り」として例祭日に限って来賓や一般の参拝者に頒布される。

御仮屋の組み立て

護符の奉製

護符袋

●遷霊祭（みたまうつし）（午後 5 時）

夕方 5 時になると、御霊遷しの神事が灯りを消した社殿で厳かに執り行われ、神輿へ御霊が遷される。宮司、禰宜、崇敬会正副会長、監事、氏子総代、総行司、猿田彦、供方 5 名が参加する。

イ）例祭（当日）

●当日準備（午前 6 時）

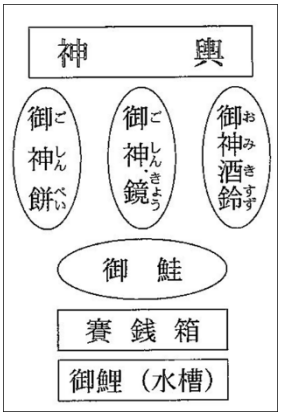
総員集合して当日の準備をする。作業としては、①社頭に国旗掲揚（還御後格納）②神輿を御仮屋へ奉安し、所定の板の上に三種の神饌を供える③御仮屋、御鮭場の装飾（国旗、しめ縄、幕等）④境内の美化、清掃⑤子供神輿を所定の位置に搬出、などである。この際、神輿の前には、御神鏡（ごしんきょう）、御神酒鈴（おみきすず）、御神餅（ごしんぺい）を供える。また、御鮭場に供える鮭は、神社側へ頭、神輿側へ腹と決められている。

社殿に奉納された鮭

これらの準備が終わると、午前 8 時に再度集合し、各任務へ就く。

御仮屋

御仮屋　三種の神饌



御仮屋の配置図

●子供神輿（午前 9 時 30 分頃）

小学生による「交通安全鼓笛パレード」が神社に到着する。その後、小学生による子供神輿と山田音頭の踊りが披露される。

子供神輿

●例祭（午前 11 時）

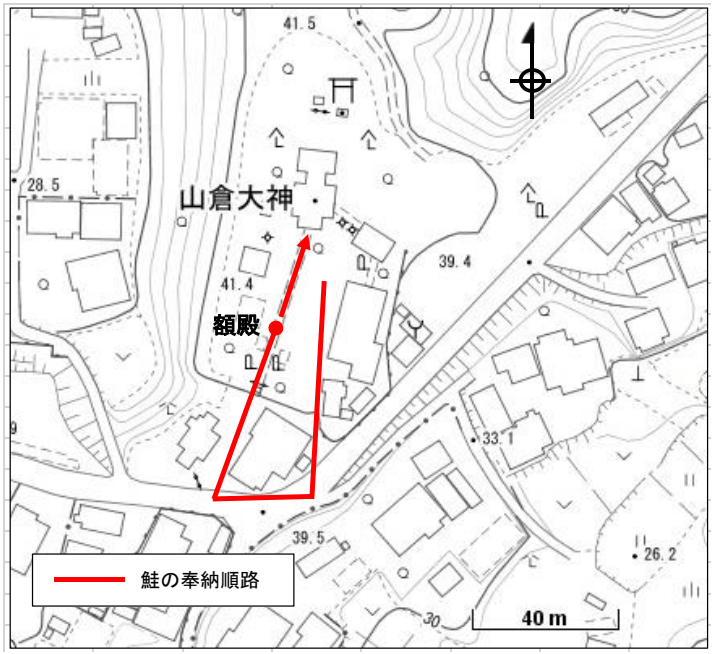
午前 11 時に神社本庁から献幣使が参向し、例祭が始まる。まず社務所前から参進の行列が出発し、いったん迂回して境外へ出て、正面から境内へ進み、額殿で修祓（しゅばつ）を済ませてから山倉大神拝殿に昇殿、鮭を奉納し、祭典が執り行われる。行列は、露払いの金棒を先頭に、先導（典儀）、猿田彦（手引き）、御鮭、神饌（総行司 3 名と供方 5 名が担当）、神官、唐櫃、正副会長、監事、氏子総代、供奉員、来賓の順となる。

鮭奉納の行列

額殿での修祓

鮭奉納の行列

猿田彦



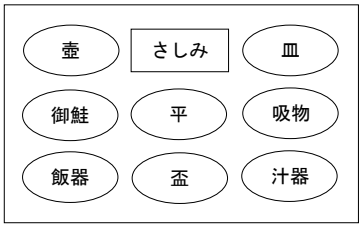
鮭の奉納順路

●直会（なおらい）（正午）

お昼には、直会所の大広間で献幣使以下神社関係者や来賓など合同での直会が開催される。宮司挨拶、来賓挨拶のあと、座配人の司会により「御神酒五献」の古式にのっとり直会が進められる。「御神酒五献」では、初献、二献、三献は飯器の蓋、四献は汁器、五献は飯器で酒を飲み干し、萬献（まんこん）が賑やかに行われる。

直会

座配人



皿　（酢のもの、大根、油揚）
壺　（甘納豆）
吸物（鶏肉、ネギ）
平　（サメ、牛蒡、人参、こんにゃく、ハス）

本膳献立の図

●出行器（でほかい）（通称でぼ）（午後 3 時）

神輿係、行列参加者、芸能保存会が直会所で出御祭の準備を整え、山車巡行・神輿渡御（とぎょ）のつつがない執行と安全祈願も兼ねて、御神酒で景気づけをする。

●出御祭（しゅつぎょ）・山車巡行・神輿渡御（とぎょ）（午後 3 時 30 分）

総行司の指示のもと、行列を整え古式豊かに厳粛に行われる。

出御祭では、鳥居前に設けられた御仮屋前で、神職による修祓（しゅばつ）や祝詞奏上（のりとそうじょう）に続き、参列者が玉ぐしを奉奠（ほうてん）する。その後、地区内への山車巡行、神輿渡御が行われる。神幸の行列は山倉大神前の道路を南に、途中坂道を下りながら、500mほど離れた吉野家旅館に向かって進む。神幸の行列では、金棒、先導、猿田彦、御鉾、御弓、御太刀、錦旗、宮司、神官、神輿、山車、両会長、監事、氏子総代、供方、供奉員の順となっている。

出御祭

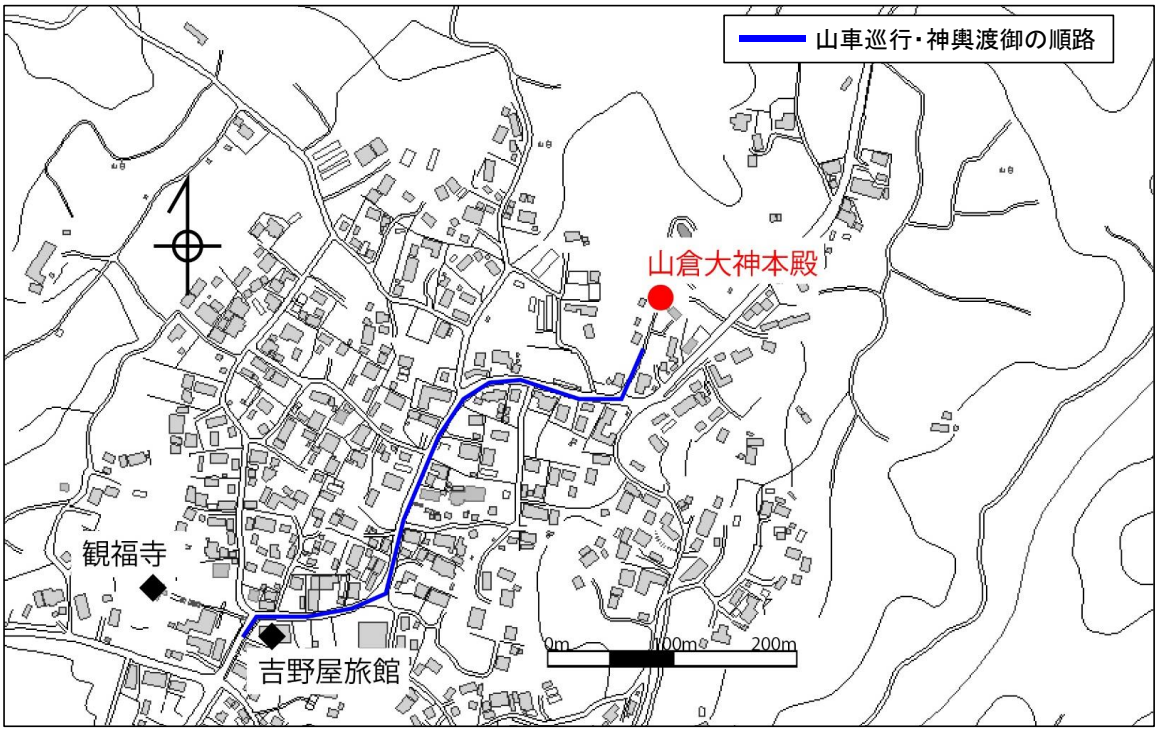
境内を出発する神幸行列

神輿

山車

吉野家に向かう行列

吉野家に到着



山車巡行・神輿渡御の順路

●御小休之儀（おこやすみのぎ）

御小休所である吉野家に到着すると、再び修祓や祝詞奏上などの式典が行われ、小休止をする。その後、ここを折り返し地点として、今度は山倉大神へ向かい、還御する。

御小休之儀

●還御祭（19 時 30 分頃）（かんぎょ）

山倉大神へ還御ののち、総員が神前に整列して、崇敬会長の音頭による「大願成就」の手打ちで「三本締め」で行う。次いで、昇殿し還御祭（みたまうつし）が執り行われ、例祭の一切が終了する。

還御

●受け渡しの儀・直会（20 時 30 分頃）

還御祭ののち、典儀の指揮により受け渡しの儀が行われる。参列者は宮司、典儀、供方 6 名で、御神酒五献により杯を干し、受け渡しの手打ちを三本締めで行う。これが済むと、祭事役員、当番合同で、座配人の司会のもと昼に準じて直会が行われる

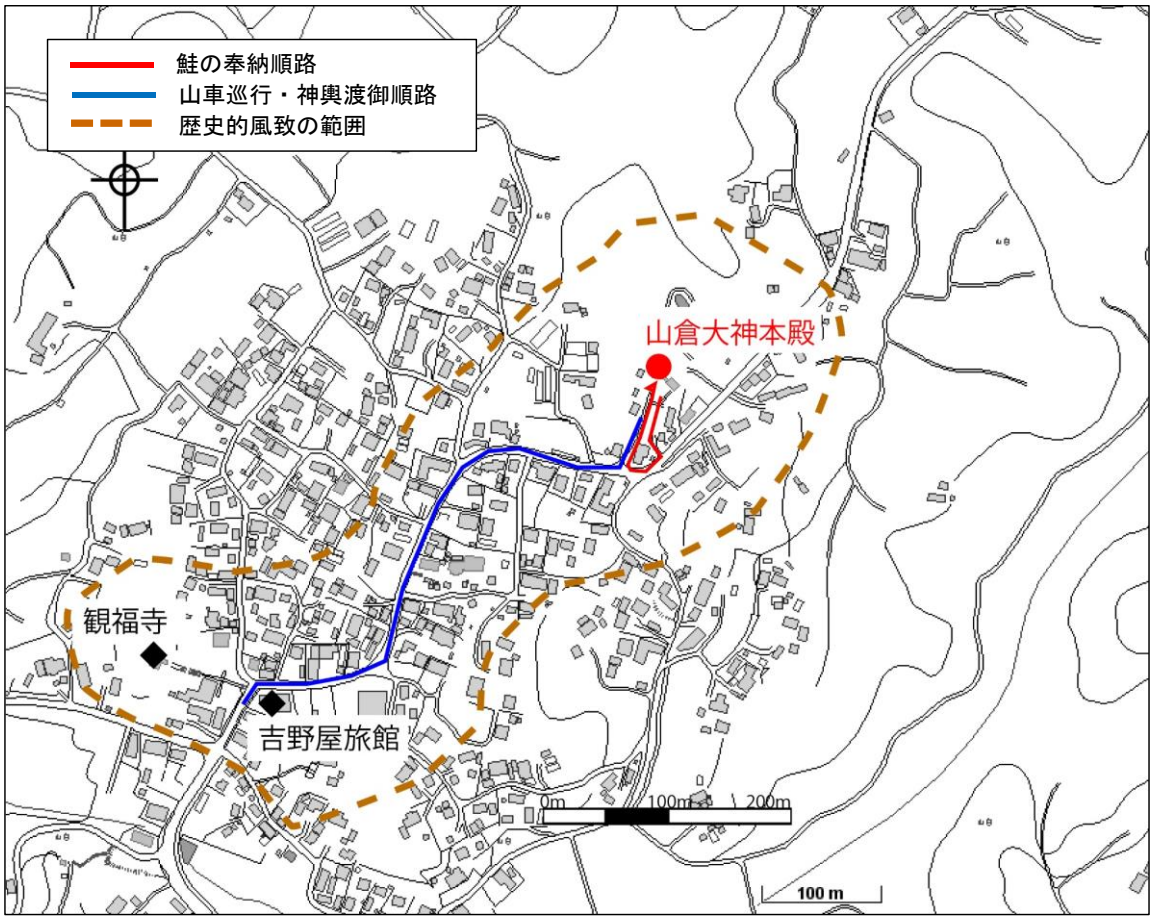
ウ）残祓い（翌日）（ざんはら）

午前 8 時に集合し、宮司、氏子総代、崇敬会役員、祭り当番等総員が参加して、幟倒しや御仮屋、御鮭場の片づけ、社殿や境内の清掃美化など祭事の後始末をする。これが終了したあと、会計の中間報告、慰労会を行う。

（4）まとめ

山倉大神の鮭祭りは、弘仁２年（811）辛卯の霜月初卯の日という山倉大神の創建にも係わる祭礼であり、かつては旧暦霜月初卯の日に鮭を奉献したことから「初卯祭」とも称している。その鮭は、当地区が支流の水源地であり、九十九里平野を経て太平洋へ注ぐ栗山川を遡上したものである。鮭の太平洋側での遡上は栗山川が南限とも言われており、期せずして、それがよく表われている祭礼であるといえる。

山倉大神の鮭祭りは、地域としての自然的な要因を持ちながら、長く地区民により受け継がれてきたことから、今もその歴史的風致が守られてきている。



山倉大神の鮭祭りに見る歴史的風致の範囲

コラム５　別当寺・観福寺の鮭の奉献

観福寺　正面

かつて山倉大神の別当寺であった真言宗豊山派の山倉山観福寺でも本尊の大六天王に対する鮭の奉献が続けられている。寺伝では、弘仁 2 年（811）霜月初卯の日に天台宗の宗祖円頓がこの地に来て、夢のお告げにより聖観世音菩薩を勧請した。その後、弘仁 5 年（814）に真言宗宗祖空海が東国巡錫の途中、他化自在天王（大六天王）を勧請した。その際、当地では疫病が流行し、村民が献じた鮭を祈祷後に村民に与えると病が癒えた。翌年、小川に大きな鮭が遡上したため、感謝の祈りをこめて御本尊に鮭を奉納した。これが初卯祭の縁起である、としている。明治初めの神仏分離により、大六天王は観福寺に移され、山倉大神とは別れるが、その後も観福寺においても鮭祭りが続けられている。観福寺では毎年 12 月 7 日と日を定めて大護摩の修法などが行われている。

このように、近世期までは大六天王として行われてきた初卯祭（鮭祭り）は、明治以降、山倉大神と観福寺それぞれの形で、営々と守り伝えられてきている。

観福寺　本堂

本堂は元々庫裏に接した茅葺、唐破風造りの伽藍であったが、僧円鏡代に現本堂の改築が企画され、明治 42 年（1909）に堂宇を起工、大正 8 年（1919）に落成により旧堂より遷座入仏した。桁行 5 間・梁間 3 間の入母屋造平入、銅板葺、正面に千鳥破風と唐破風を付けている。